

# 伝えたいこと

美夏と直人は同じクラスで、席はとなりどうしだ。

「美夏さん、つくえの向きをそろえた方がいいよ。」

「えんぴつ、ちゃんとけずつた方がいいよ。」

直人は、美夏に対して、毎日、こんな調子で、細かいことを注意してくる。美夏は何を言われても、初めは「はい、はい。」と聞いていたが、やがて、「いいじゃない、別に。」と、つき放すようになった。そして、いつのまにか、美夏と直人は、あまり話さなくなってしまった。

美夏と直人が二人で日直をする日がやってきた。おたがいに少し気まずい思いで一日が始まった。朝の会、給食、帰りの会の司会をしたり、教室をい動するときに電気を消したりする。

美夏と直人は、帰りの会が終わつたあと、みんなのつくえといすを整理し、落し物の

やごみがないかをかくにんした。

美夏は、入院しているおばあちゃんのお見まいに、お母さんといっしょに行くことになっていた。

(今日は、おばあちゃんのたん生日。早く帰って、おばあちゃんにわたす手紙を書かないと。)

と思いながら、美夏はまどをしめ始めた。

「あとは、まどと電気で、日直の仕事が終わるね。」

直人の声がなかつたのでふり返ると、ろうか側のかべのけいじ物の前に立っている直人のせ中が見えた。

「何をしているの。」

「けいじ物の画びょうが取れているものがあるから、きれいにはり直しているんだよ。」  
美夏はびっくりした。

「それは、けいじ当番の仕事じゃない。まどをしめて電気を消して帰ろうよ。」  
「帰りたければ、先に帰つていいよ。」

直人のいつもの言い方だった。

「何よ、その言い方。わたしが日直の仕事をしないで帰るみたいじゃない。まどはしめたし、あとは電気を消して終わりよ。」

と、美夏はきつく言った。直人は、  
(だって、先生が言っていたよ。決められた仕事だけじゃなくて、気づいたことはや  
ることが大切だつて。)

と思いながらだまつてしまつた。

「日直の仕事は終わりだから、わたしは帰る。あとは、勝手にやってね。」

と直人に言つたあと、美夏は、教室の電気を消して帰つてしまつた。

その日の夜、美夏は、直人とのことを思い出していた。  
(このままいいのかな。……)

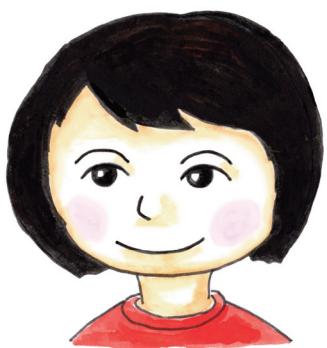
## 伝えたいこと

次の日の朝、美夏が教室に入ると、直人はもう席に着いていた。美夏は、昨日の夜ずっと考えていたことの答えを直人に伝えた。

すると直人も美夏の方をまっすぐに向いて答えた。

それから、二人は少しずつ変わって、仲よくなつていった。

(野村 宏行 作)



美夏は、昨日の夜